

1:

パンッ！！　パンッ！！　パンッ！！　パンッ！！

「んんっ♡　んっ♡　んんっ♡　んんんっ♡」

（あ～、もうっ！！　毎日毎日、本当に……）

ナミが寝ている横のベットでは、ここ最近毎日のようにロビンと男が悪魔の実の副作用を抑えるためのセックスをしていた。

ロビンはナミに聞こえないように声を抑えているつもりなのだが、ベットの軋みの振動や、部屋中に充満しているチンポ臭などによって、ナミが眠れるはずもなく、もちろん喘ぎ声も耳に入ってきていた。

そのためナミはここ最近、毎夜悶々とした状態を強いられている。

ギシッ……ギシッ……ギシッ！！

「んんっ♡　んっ♡　んぐううう♡♡♡♡」

「んっ……………」

一層激しい男の腰振りで、ロビンが悶えている様子が、そちらを見なくても分かるような振動と漏れる声に、思わずナミの下腹部もより一層熱くなってくる。

目を瞑って、二人の営みを直接見ていないからこそ、頭の中で明確に行為が想像されてしまい、どんどんチンポの事しか考えられなくなっていく。

自然とナミの右手が股間に近づいて、パジャマのズボンとショーツの中に入り込んでいった。

（こんな事……毎日横でヤられてたら……こっちまでおかしくなるじゃない……んっ♡）

そしてナミは下半身をもぞもぞさせながら股間の疼きを抑えるため、自身の右手で自慰行為を始める。

クチュッ……

（うわっ……もうこんなに濡れてる……）

自身の膣内が想像したよりも愛液で満たされており、驚きと戸惑いに眉を悩ませつつも、指を動かして膣を刺激し始める。

「んっ……んんっ……」

自慰行為をすることによってナミの口からも声が漏れてしまうが、幸い隣のセックス音が大きいので聞かれる心配はなかった。

ロビンの抑えている喘ぎ声と、ベットの振動と、部屋に充満した性の匂いを嗅ぎながら、ナミは激しく右手を動かして絶頂に達しようとしていた。

「んんっ♡♡　んんんんっ♡♡♡♡♡♡」

「んっ……♡　んんっ……♡　んくっ……♡♡♡」

（んんっ……♡♡♡　イクッ♡♡♡）

ロビンはチンポで、ナミは自分の手で、まるで互いにタイミングを合わせた様に二人は同時に絶頂に達する。

だが絶頂に達した二人の表情にはどこか違いがあった。

片やロビンの方は生チンポで子宮を貫かれ、満足げな表情をして男に身体を絡ませているが、片やナミの方は絶頂に達したにもかかわらず、余り身体の疼きが解消されていないような複雑に悩ましい表情をしている。

「はあ……はあ……はあ……んっ……」

（ヤバイ……このままじゃ……おかしくなっちゃいそう……早めに手を打たないといけないけど……変に下手に出て……舐められるわけにもいかない……）

未来の海賊王が乗る船の一員として、ナミはチンポに負けない決意を胸に、男に身体の疼きを解消させるため、動き出すのであった。

……………

……………

………

「というわけだから、ちょっとあんた、オナニーしてみなさいよ」

どういうわけか男にはよく分からなかったため、戸惑いの表情で無言になってしまっていた。

ロビンが出かけていたため男が女部屋でうたた寝にしている時に、ナミがいきなり提案してきたことは、チンチンの実の能力がどれほどのモノなのかという事だった。

（この船に乗ってるんだから……戦闘面じゃあいつらに負けちゃうし、少しでも航海士としては頭脳で勝負しなくちゃね。そのためにも、悪魔の実の能力はどの程度のモノなのかをどんなものでもいいから把握しとかなないと……決してチンポに興味があるとか、そんなんじゃないわ！！）

好奇心が勝っているようなぎこちない笑みを浮かべて、顔を赤くしているナミの表情は、何処か男の興奮をそそるものになっている。

勿論男ならナミを見ながらの自慰行為など余裕だ。

ナミは青いタンクトップに白いミニスカートを履いてエニエスロビーの時に見た格好をしている。

タンクトップとミニスカという薄着から見えている肌は、ナミのハツラツとした性格と相まって水を弾きそうなほど張りが伺える。

改めて間近に見たその姿はロビンの大人の色気とはまた違って、少し幼さを残しているが、これからまだまだ発展していくであろう未成熟の可能性が詰まりまくった禁断の果実のようなエロスを感じる。

近くにいることによってより一層匂いも強く感じ取れ、蜜柑のような柑橘系だが甘さを感じるフレッシュな女の匂いがチンポに響いてくる。

手配書の写りでも色気を感じ取れたその肉体が、今、目の前にあり、さらにエロいことをしろと命令してきたことによって、ロビンとは違った性行為が行われようとしている現実が、男の脳をクラつかせてきた。

「どうしたの？ まさか、断ろうってことはないわよね？」

目を見開いて食らいつく様に自分の身体を見つめている男を見て、断ることなどないはずだと分かっているながらも、挑発的な笑みを浮かべてそう問いたしてくるナミ。

それを聞いてビリビリと体内に感じる性の刺激を受けながら、言われた通り自慰行為を行おうと徐に肉棒を取り出そうとしたときに、ふと男の頭にある考えが浮かんだ。

「え？ ロビンを抱いてチンポが肥えてるからオカズが足りなくて抜けない？ だから私も目の前でオナニーしろって！？」

男から告げられた申し出に少し引き気味に驚くナミ。

(冗談じゃないわよ！　いくらロビンと出来てる男だからって！　全然知らない男の前でオナニーするなんて！！　……でも、私もこいつにとんでもないこと言ってるんだから……ここで舐められるわけにはいかないわね)

ロビンとの度重なる戦闘（セックス）によりチンチンの実のレベルが上がり、男のチンポ臭もより濃厚なものになっているため、それを直に受けてしまっているナミは早くもチンポ脳になりつつあった。

そのため普段では考えられないようなエッチな選択肢を取るようになってしまう。

「じゃあ、わかったわ！　サービスよ！　この私があんたの目の前でオナニーしてあげるんだから、バキバキチンポから盛大に精液吹き出しなさいよ！！」

そう言うナミは歯を見せながら緊張と興奮に満ちた笑みを浮かべて、脚を蟹股にして股間を突き出すと、左手でスカートを捲って右手をショーツの中に入れて指を膣口に添えた。

「ほら、何してんの？　あんたもさっさとチンポ扱きなさいよ！」

ナミが下品に両足を蟹股に開いて、自身の手をショーツの中に突っ込んだ姿を見て、いきなりのエロさに驚いてしまった男。

だがナミに指摘されて気を取り直した男は、すぐさま全裸になってそのいきり立った肉棒を泥棒猫に見せつけた。

ボロンッ！！

「いっ！？」

(なにあれ……前見た時より……なんかもっとグロくなってない？　血管浮き立たせ過ぎだし……匂いも……なにこの生臭臭……)

新しい女を見つけた肉棒はその嬉しさでギンギンに勃起しており、しかもロビンの時とはまた違った形に変形していた。

血管がバキバキに浮き上がって膣壁を引っ掻きそうな部分は変わらないが、どちらかというと竿の前部分、亀頭に近い部位が大きく肥大化しており、膣の内側を無理矢理拡張させるような形状になっている。

「ごくっ……」

その凶悪な肉棒を見たナミの身体は一瞬で反応してしまい、早くも膣内から愛液が漏れだしてきていた。

(やだ……チンポ見て、匂い感じただけで濡れてきちゃってる……身体も熱くなってるし……ここは早

めに一回イッとした方が良いわね……でも、こいつのチンポも抜いておかないと……ヤラれるかもしれないし……)

クチュッ……クチュッ……クチュ……クチュ……

「んんっ……んっ……んんっ……んっ……♡♡」

男を射精させて性欲を抑えさせるはずが、自分でも無意識の内に指を動かして先に自慰行為を始めてしまうナミ。

いつもやっている様に人差し指と中指を膣内に入れて、穿る様に動かすのだが、今日は一段と愛液が漏れており指がスムーズに動いて膣壁を刺激している。

蟹股で白いショーツの中に手を突っ込んでオナニーし始めるナミ。

ヒールサンダルでつり上がった脚を蟹股に広げ、震えている様が異常にエロく感じさせ、目の前で見ていた男を猛烈に興奮させる。

「んっ♡♡ んんっ♡♡ ちょっと!! ぼさとしてないで、早くあんたも始めなさいよ!!」

ナミに指摘され、蟹股オナニーに見とれていた男は、ハッとしたように頭を震わせ、右手で竿を扱き始める。

クニユンッ!! クニユンッ!! クニユンッ!! クニユンッ!

ナミの股間を凝視しながら必死に右手で肉棒を擦り始める。

猛烈な扱きに既に鈴口からはカウパーが漏れており、肉棒が涙目でナミの事を見つめている。

興奮していつの間にか二人の距離は近づいており、あと少しのところで肉棒がショーツに付きそうなくらい迫っていた。

近づいてきた凶悪チンポを感じて、ナミは悩まし気に眉をくねらせ始める。

(なんて匂いなの……少し近づいただけで、この生臭さ……頭がクラクラしてきちゃう……チンポの臭いを嗅いだけで……膣内がもっと濡れてくるし……)

チンポ臭で身体が火照ってきたところに、ナミは自身の指の動きを激しくさせる。

いつもよりも深いところまで膣内に指を突っ込んで、疼いている奥の部分を引き搔く様にかぎ分ける。

クチュッ……クチュッ……クニユッ!!

「おっ! おっ! おほっ♡♡♡」

グロテスクチンポを見ながら、感じながらのオナニーはいつもより違った高揚感を得ており、ナミをより大胆に、より変態にさせていく。

(私ばかり感じてちゃ……イケないわね♡)

ナミは快感を得て目が半開きになっているものの、男に負けるわけにはいかないという意思を強く持ち、挑発的な笑みを浮かべて男を見ながら厭らしく腰を振り始める。

「ほらほらどうしたの? もっと必死に扱きなさいよ! この私がここまで厭らしく、目の前でオナニーし

てあげてるんだから♡」

クチュッ！！　クチュッ！！　クチュッ！！　クチュッ！！

男を挑発するため、より激しく膣内をかき回し、自身の肉壁のヒダヒダをかき分けて粘膜音を大きく漏らしながら、厭らしく腰をくねる。

泥棒猫の挑発行動に男のチンポが凄まじく反応して、一気に射精欲が高まったため、歯を食いしばって必死に我慢し始める。

「んんっ♡　んあっ♡♡　ふふふっ♡　どうしたの？　一気に射精したそうな顔になっちゃってるわよ♡　良いわよ♡　射精すなら早く射精しちゃいなさい♡　ほれほれ♡」

ナミが男を射精するため、腰を振りながらさらに突き出してきた。

そのためショーツの上の部分から中が垣間見え、既にぐちょぬれになっている膣口が露わになる。

男はその膣を見て何かが吹っ切れ、左手でナミのショーツを引っ搔けると、舌にずらして膣を丸見えの状態にして、肉棒を近づけた。

「ちょっと！！　誰がそんなことしていいって……」

男の行為にナミがそれを咎めようとした瞬間……

「んあっ！？」

男はオナニーにより勃起してむき出しになったナミのクリトリスを、手コキの動作を利用して肉棒でペチペチと叩きだした。

ペチュンペチュンペチュンペチュン！！

「んおおっ！！　おほっ！！　おほおおおっ♡♡♡♡♡♡　クリッ！！　クリペチっ、キモチいい♡♡♡♡　クリ攻めされて……イクッ♡♡♡」

絶頂間近であったナミの膣はクリトリスを責めることによって、さらにそのフレッシュな女体を追い込み、愛液を漏れさせた。

スカートから伸びる魅惑の太腿には既に愛液が垂れ流れており、時折痙攣と共にしただれ落ちていく。

さらには余りの快感にナミの表情は片眉がつり上がった善がり顔になっており、今まで見たことがない下品なアヘ面に男の興奮も高まっていく。

ここまで来たらナミと同時に絶頂するため、手コキをしながら激しくクリを攻め続けた。

竿を扱きながら肉棒本体を上下に揺らして、亀頭部分をクリトリスに当てて、ぐりゅぐりゅと責め立てる。

「ん　んっ！！　ん　っ♡♡　ん　っ♡♡　ん　んっ！！」

射精寸前の亀頭に当たる勃起クリトリスの感じがこそばゆいような感覚で、不思議な快感を得ており、身体全体を痺れさせた。

対するナミも、陰核を集中的に狙われて、男よりも身体に痺れを感じており、身体全体を快感によって痙攣させている。

陰核を責められて子宮が疼きだしており、そこを責め立てようと自身の指を伸ばしているが、届くはずもなく肉壁を引っ掻くだけになっており、もどかしいようなそれが気持ち良いようなぐちゃぐちゃの快感で歯を食いしばって涎を垂らしている。

もはやチンチンの実を調べるということなど忘れたかのように、二人は互いに秘部を押し付け合いながら変態的なオナニープレイで絶頂しようとしていた。

ナミの香りを感じ、こんなに近くに憧れの女体を前にして、男は肉棒に力を入れている。

そしてナミの方も、ここまで我慢してきた性欲が発散されるように男のチンポが自分に向いており、陰核を攻撃してくれていることで絶頂に達しようとしていた。

「んんっ!! んほっ♡ イクっ!! イクっ!!! クリ責められて……オナニーしながら……イっくううううう♡♡♡♡♡♡」

激しい声を出しながら絶頂しそうなナミの膣口に狙いを定めて、男も盛大に射精する。

ドッピュウウウウ!!! ドッピュウウウウ!!! ビュルッ!! ビュルッ!! ビュルルルッ!!!

「んおおおおおお♡♡♡♡♡♡ キてる!!! 熱々の精子ぶっかけられてるううううう♡♡♡♡♡♡」

ナミは身体と頭を逸らせて、半目の状態で口を盛大に開けながら、思いっきり絶頂した。

熱々の白濁液を膣口とクリトリスに受けて、連続で絶頂している様に、身体を小刻みに何度も震えさせている。

「あっ……♡ ああっ♡♡ ああっ♡♡♡ はああっ♡♡♡」

男も自分のチンコから射精される精液をまじまじと見届ける。

ナミの穢れを知らないショーツの中に、自分の欲望が詰まりまくった白濁の液が大量に流れ込んでいき、侵食していく。

ナミの右手と膣口とショーツ内全体を白く染め上げて侵略していく精子に、自分のモノにしているかのような支配欲を操られ、射精後にも関らずまたもや興奮してきていた。

「はあ……はあ……はあ……あ……ちょっと! あむっ……むちゅ……れろっ……」

興奮が高まりすぎた男は、急にナミを抱き寄せて、左手を女体の背後から回してタンクトップの中に滑り込ませて左乳を無造作に揉みしださず。

そして絶頂により伸びていた泥棒猫の舌を味わうように自分の舌を絡めさせてベロチュウをし始めては、右手をショーツの中に突っ込ませ、先ほど射精した精液を膣内に刷り込んでいった。

「じゅるっ♡ んあっ♡ れろっ♡ ちょっろ……んっ♡ 誰がキスしていいって言ったのよ! んあっ♡ それに……んっ♡ 勝手におっぱい揉むなんて……んあっ♡ れろっ♡ んんっ!! こら……乳首コリコリするな! んっ♡ んんっ♡ れろっ♡」

絶頂により感覚がマヒしているナミは、男のベロチュウを受け入れつつ、言葉では拒否しているが、身体では特に抵抗なく好きなように弄らせている。

さらにナミは右手で男の肉棒を触りだして、物欲しそうな手つきで揉み解すように弄りだした。

「んっ♡ んんっ♡♡ あんたの狙いはわかってんのよ……私にエロいことして……れろっ♡ じゅるっ♡  
その気にさせて……れろっ♡ エッチするつもりなんでしょ……れろっ♡ れろっ♡ ふんっ!! そんな  
股の緩い女だと思わないでよね!! れろっ♡ じゅるっ♡ 私も海賊の女! れろっ♡ じゅるっ♡ ぢ  
ゅるっ♡ 簡単に堕ちると思ったら……大間違いよ!」

いくらディープキスを受け入れ、乳首をコリコリされ、膣内に精液を刷り込まれようとも、未来の海賊王  
がいる船に航海士として乗っているナミは、その鋼鉄の意志で男の性への誘惑をはねのけていた。

流石は泥棒猫の女。

男がいくエッチな攻めをしようとも、その揺るぎない意志を崩すことが出来るはずはないのだ。

パンッパンッパンッパンッ!!!!!!

「んっほおおおおおお♡♡♡♡♡♡♡ 生チンポ気持ち良いiiiiiiiiiiii♡♡♡  
♡♡♡♡」

いつの間にか流れるようにチンポを挿入されていたナミは、自身のベットの上で肉棒で子宮を貫かれて善  
がりまくっていた。

正常位で逃げないように腰をがっちり掴んで、並の膣内にフィットするように肥大化した肉棒は、的確に  
女体が反応するように膣内を刺激し、快感の波で溺れさせようとしていた。

「ん ん ん っ♡♡♡♡♡ 良い!!!! い い っ♡♡ 膣内がアンタのチンポの形になって  
る!!!!!!!!!! それ以上に押し広げられちゃってるううううう♡♡♡♡♡♡♡」

腰を掴んでいる男の両腕を握りしめて、身体と頭を逸らし、歯を食いしばって快感に身を委ねていた。

余りにエロすぎる善がりを見せているナミと、ロビンの膣内とはまた違った締め付けるような膣内の快感に、男の興奮も高ぶってくる。

射精欲が迫りまくっているところで、子宮口をブッ叩いた後、あえてゆっくり肉棒を抜いていく。

「んっ!!!! ん ん ん ん ん ん ん ん っ!!!!!!!!!! ダメっ!!!! ゆっくりダメ!!!!!! 膣内の肉が吸い付いちゃって!!!! 持っていかれるっ!!!!!! おっ……おっ……おっ  
お お お お お っ!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

膣内の肉ヒダを捲れあがらせるくらい、肉棒のデカさと膣壁の吸い付きがマッチしてしまい、盛り上がってしまう自身の股間を見ながら、余りにも下品な声を上げて涙を流して感じまくるナミ。

そんな善がり狂ったナミに止めを刺すように、男は再び高速ピストンを始めた。

パンッパンッパンッパンッ!!!!!!!!!!!!!!

「お おっ!!!! お おっ!!!! お おっ!! お おっ!! イクっ!! イクっ!! またチンポでイクっ!!!! さっきまで処女だったマンコ、子宮までチンポで貫かれて、イク!!!! イクウウウウウ♡♡♡♡♡♡♡」

膣を穿りだした一瞬でメス穴になった女に興奮した男は、望み通り膣内で絶頂出来るように、盛大に射精する。

ドッピュウウウウ!!!! ドッピュウ!!!! ドッピュウ!!!! ビュルッ!!!! ビュルッ!!!!  
ビュルルルッ!!!!

「んおおおおおおおお!!!!!! 膣内射精キてるううううう!!!!!! イクッ!!!! イクッ!!!!  
イッくううううう♡♡♡♡♡♡♡」

腰を浮き上がらんばかりに逸らせながら、盛大に膣内射精で絶頂している女を抑えるように、腰をがっちり掴んで最後まで精液搾りだしていく。

「おっ……お♡♡ はあ♡♡ はっ……ああっ♡♡♡」

舌を伸ばしきりアへ顔を晒して絶頂し、振り返ったフレッシュな淫乱女体が余りにもエロく、男はむき出しになっている胸を乱暴に鷺掴みして、乳首を摘まんだ。

そして腰をぐりぐりしながらチンポを膣内に押し込み、さき程から溜まっていた尿意を吐き出すように、そのまま泥棒猫の膣内に排尿していく。

ジュロツ……ジュロツ……ジュロロロロロロロ!!

全身を揺らしながら女体の膣内に射精していく背徳感に、脳が痺れてしまい正常な判断が出来なくなっている男。

「いっ……い い い い !!!!! オシッコ出されてる……身体に……膣内に……♡♡♡ あっ……あ  
ああっ♡♡♡♡♡♡♡」



だがナミも膣内小便を出されて、その温かさや、膣内にとどまっている肉棒の気持ち良さもあって、連続絶頂していた。

憧れの女の乳首を摘みながら、膣内で小便をする気持ち良さに支配欲を搾られ、それを受け入れて絶頂しているナミにもはや遠慮はいらないため、男は再び唇を奪って、腰を激しく振り出した。

(ああっ♡♡♡ チンポ気持ち良い……♡♡♡ もうなんか、こいつのチンポ良いからどうでもいいかも♡♡♡♡♡♡)

「れろっ♡♡ くちゃ♡♡♡ れろっ♡♡ くちゅ♡♡♡ じゅるっ♡♡♡」

ナミはそのまま男を受け入れつつ、両手両足を男の身体に絡めさせ抱き着く様に身を任せた。

もはや最初のチンポに負けないように振る舞っていた姿はどこにもなく、その姿はもはや男の虜になった一人のメスの姿であった。